

マルサスの經濟理論

——特にマルサスの需給論（彼の價值論の一節）——

坂 本 彌 三 郎

獨りマルサスに限らず總じて古典學派に屬する學者の價值學說を知る爲には少くともそれらの學者が、(一)價値の意義、種類及び殊に價值論に於て研究の主題とする價値、(二)需給及び需給關係、(三)生産費及びその構成要素、(四)價値の決定、(五)價値の尺度、等の諸點に就て如何なる見解を有するかを吟味しなければならぬ。茲で假りにマルサスの需給論といふのはこれら五點の中(二)即ち需給及び需給關係に就ての見解を指し、價値決定に就ての見解と共に彼の價值學說中最も主要なる部分に屬してゐる。

右の如き意味のマルサスの需給論は如何なるものであるか、又それは古典學派の他の需給論に比較して如何なる特徴を示し如何に評價さるべきであるか、それらの點を明かにするのが本文の主旨である。

二

マルサスの需給論は彼の價值學說の他の部分と同様に時代により種々變化してゐるが、大體限界購買者に重きを置く需給論と、表現需要烈度 “Intensity of demand” に重きを置く需給論との二つに區別することが出来る。

イ、限界需要者に重きを置く需給論

マルサスは一七九八年の人口論初版に於て救貧法を種々の觀點より考察し、それを痛烈に批難してゐる。その一節に貧民救助の爲め與へる金は食料品の價格を騰貴せしめ、その騰貴は再び貧民救助の必要を生ぜしめること（七六頁）財貨が稀少なる場合には最も多くの貨幣を提供する者のみはその所有者になること（七六頁）救貧法は貧者を富者にし、富者を貧者にするが故に、財貨の分配を變更する事等を述べてゐる。これらの考察に一步を進め貧民への救助が食料品の價格を如何に騰貴せしむるかを示すために案出されたのが限界購買者に重きを置く需給論である。

マルサスにこの需給論を工夫する機會を與へたのは一八〇〇年の穀價の暴騰である。彼はその前年即ち一七九九年より同年秋に亘り北ヨーロッパの諸國を旅行し、人口論二版の材料を蒐集してゐたのであるが、その際見聞したスエーデンの穀物の不作とその騰貴とを英國に於ける一八〇〇年のそれらと比較し、後者に於ける穀

價騰貴の割合は單に不作といふが如き自然的事情のみによつて到底説明し得るものでなく、遙かそれ以上に暴騰せることを推斷すると共に前記人口論初版に於ける所論に基き、それを主として、救貧法の作用による人爲的現象と看做した。而して世論が穀價の騰貴を専ら賣惜しみ買占め等の所爲に歸して穀物高を攻撃し、又議會が召集されてその對策を論議せんとする等の事情に鑑み、マルサスは恐らく人口論初版に於ける思索を更に進め、救貧法による救助が何故に又如何なる程度に穀價を必然的に暴騰せしむるかを考慮し、遂にこれらの點を解明する新しき需給論に想到した。而してそれを骨子とし一八〇〇年十一月十一日の議會前、急據 'High price of provisions' と題する小冊子を公にした。彼は十一月二十八日附 J. Turner 宛の書簡に於てこの間の消息を記して、

Before I went to Bath, I had been to Hastings for some time with my sisters, and in my ride to Town, an idea with regard to the present high price of provisions struck me so strongly, that in the day or two that I remained in Town previous to my Bath expedition, I determined to write down a few thoughts on the subject..... I sat up till two o'clock the evening before I went to Bath to finish it, that it might come out before the meeting of Parliament.

と言つてゐるが、彼を強く打つた一つの考へと謂ふのは、ほん今日の限界購買者に重心を置く需給論に該當し、その先驅をなすものと言へる。

1) The Economic Journal. 1897. vol. VII, p. 270. cf. Bonar, Malthus and his Work. 2nd. ed. pp. 418—419.

マルサスは五〇人によりて要求さるゝ或る財貨がその生産上の障害の爲めに四〇人にしか供給され得ない場合を假定し、それら五〇人の需要者中の首位者より第四〇番目の人、*'the fortieth man from the top'* がその財貨に二志を又第四〇番目以上の三十九人の人々が種々な割合で二志以上を、更に第四〇番目以下の人々が二志以下を費消し得るものとすれば、實際價格 *'the actual price'* は二志となるものとし次の如く記してゐる。

*If the fortieth man from the top have two shillings which he can spend in this commodity, and the thirty-nine above him, more, in various proportions, and the ten below, all less, the actual price of the article, according to the genuine principles of trade, will be two shillings.*¹⁾

然らば實際價格はこの場合、何故第四〇番目の人の支拂はんとする二志に一致するかに就ては、それ以上(の價格)に於ては供給される財貨の全部が賣却されず、又その價格に於て全部が購買されるが故に、販賣者はそれ以下の價格を要求する理由は存せざるものとして、

*If more be asked, the whole will not be sold, because there are only forty who have as much as two shillings to spend in the article; and there is no reason for asking less, because the whole may be disposed of at that sum.*²⁾

と謂つてゐる。

右の叙述に續いてマルサスは救貧法による救助の作用を念頭に置きつゝ、需要者の購買力の増加が何故に又

1) *High Price of Provisions*. pp. 5—6.

2) *Ibid.* p. 6.

如何なる程度に價格を騰貴せしむるかを説明してゐる。即ち假りに、第四〇番目以下の購買より除外されたる貧しき人々に一志づゝを給與し、五〇人の人々が凡て二志若しくは二志以上を支拂ひ得るものとすれば、賣惜み買占め等の操作でなく「公正なる取引の純粹な原則」*'genuine principle of fair trading'* により價格は直ちに騰貴せざるを得ない。蓋し二志に於ける需要者は供給を超過し(一一頁)この超過する一〇人の需要者は、價格の騰貴による外購買より除外しないからである。然らば價格は如何なる點まで騰貴すべきか。マルサスによると、この場合價格は必然的に五〇人中下位の一〇人の購買能力を越ゆる點まで騰貴するのであるが、この騰貴は「公正なる取引の原則」に基くものとして認容されざるを得ないのである。彼はこの點を次の如く記してゐる。

…… the price must be allowed to rise to that point which will put it beyond the power of ten out of the fifty to purchase.¹⁾

斯くしてマルサスは、價格は常に第四〇番目の人が支拂ひ得る價格に最も近き點に於て確定するものとして…… the price would always be fixed, as nearly as possible, at that sum which the fortieth man at the top could afford to give.²⁾と述べてゐる。

以上は 'High price of provisions' 中に於ける需給論の骨子であるが、マルサスは主としてこの需給論を用ひ

1) Ibid. p. 7.
2) Ibid. p. 7.

て穀物肉類等の食料品の價格が如何に決定され又救貧法の作用がそれらの價格を如何に暴騰せしめるか、を説いてゐる。その所説中には、當時及爾後のマルサスの需給論を理解する爲めに逸すべからざるものがある。今それらの稍々重要な二三の點を擧げれば、

一、マルサスは 'High price of provisions' に於ては需給の意味を明示してゐない。然し前記の例及びその他の個所に於て、四〇人分又は五〇人分と謂ひ、それらを人數によりて表はしてゐるのは、販賣又は購買せんとする財貨の量を説明の便宜上と別言したものと觀るべく、換言すればマルサスは、需給についてはそれらの數量又は範圍に重きを置く立場を採つてゐたものと察せられる。

二、次にマルサスの謂ふ四〇番目の人が今日謂ふ限界購買者を指してゐることは明かであるが、彼は未だ限界購買者若しくは最終購買者といふが如き一般的名稱に想到してゐない。而して穀價の騰貴を論ずる場合には、四〇番目の人若しくは限界購買者に相當する者を表す爲めにむしろ 'the poor' p. 9, 'the labouring poor' p. 15 'the lower classes' p. 11 といふが如き文字を使用してゐる。これを假りに限界購買者の第一の變形と呼んで置く。

又或る場合には、マルサスは限界購買者又は 'the poor' 'the lower class' 等を更に廣義なるものに變形し、供給を需要に適合せしめるに必要な人類の人々が支拂ひ得る價格であるとして

.....according to the genuine principle of fair trade, their price was fixed at that sum which only such a

number could afford to give, as would enable the supply to answer the demand.¹⁾

と謂つてゐる。限界購買者の第一の變形に對して便宜上これを第二の變形と呼ぶことにする。

最後に需給關係であるが、マルサスは價格の決定と騰落に關聯して恐らく需給の一致關係と超過關係との二つの需給關係を認めてゐる。

先づ需給の一致關係であるが、謂ふまでもなく限界購買者の支拂ひ得る價格は、需給を一致せしめる價格であつて、財貨の供給が四〇人分しか存せざる場合、價格が需要者五〇人中一〇人を購買より除外し、²⁾購買能力者を四〇人に限定する點に於て決定され、又はその點まで騰貴すると謂ふのは、換言すれば需要を四〇人分の供給に一致せしめる點に於て決定され、又はその點まで騰貴することを意味する。恐らくマルサスは自からこの點を認めて居り、前記限界購買者價格の第二の變形たる「供給を需要に適合せしめるであらう人數の支拂ひ得る額」の如きはほゞ今日謂ふ均衡價格に該當するものと言へる。^(註一)

次に價格の騰落の問題は、騰落の運動そのものと、騰落點、即ち運動の靜止する點の、二つの問題に區別し得るが、後者はむしろ價格決定の問題に屬し前者即ち騰落の運動が謂はゞ騰落 proper の問題であると言へる。マルサスはこの意味の價格の騰落を需給の超過關係に基くものとしてゐるのである。

マルサスの需給の一致及び超過關係を通じて特に注意すべきは、それが必ずしも自然價格を前提しない點である。勿論二三の個所では例へば

1) High Price of Provisions. p. 12.

2) Ibid. pp. 6, 7.

When any commodity is scarce, its natural price is forgotten, and its actual price is regulated by the excess of the demand above the supply.¹⁾

と言ひ又は

If butter, cheese, had continued at their usual price, they would have been purchased by so many, to come in aid of an inferior kind of bread, or to give a relish and additional nourishment to their potatoes and rice, that the supply would not have been half adequate to the quantity of these articles that was wanted.

These commodities, therefore, rose, as naturally and as necessary as the corn,.....²⁾

と謂ふ如く自然價格若しくは通常價格に於ける需給關係を云々してゐるが、多くの場合その一致關係及び超過關係の何れも自然價格の束縛から解放されてゐる。蓋し、限界購買者の支拂ひ得る價格即ち現實に需給の一致關係を招來する價格は、必ずしも自然價格でなく、多くはそれと異なる價格であり、又マルサスの所謂價格の騰落は、必ずしも自然價格以上又以下への騰落を指さず、需給の超過關係は單に自然價格に於ける需給の超過關係を意味するものではない。むしろ多くの場合、彼は一つの實際價格より他の實際價格への變動と現實の市場價格に於ける需給の超過關係をも説き、例へば

With this additional command of money in the lower classes, and the consequent increased consumption, the number of purchasers at the then price would naturally exceed the supply. The corn would in consequ-

1) Ibid. p. 5.

2) Ibid. p. 12.

ence continue rising.¹⁾

と謂つてゐる。

マルサスの需給は需給關係と共に右の如く、自然價格の束縛から脱脚して、自由なそれ自らの世界を與へられてゐるのである。この點は單にマルサスの價值學說に於てのみならず又古典學派の價值學說上極めて重要な意義を有し決して看過してはならない。

(註一) マルサスは、價格は限界購買者の支拂ひ得る「額」若しくは需給を適合せしむるに必要な人數の人々が支拂ふ「額」に於て決定されるといふのみで、限界購買者又は需給の一致關係が價格を決定するとは言つてゐない。

然し彼は超過關係例へば供給に超過する需要が價格を騰貴せしめるとしてゐるのであつて、この點からすれば或は一致關係にある需給が價格を決定する如く思惟せるものと推察される。

以上は一八〇〇年の“High price of provisions”中に於ける需給論の大要である。前記の書簡によりて明かなる如く、マルサスは旅行中にこの需給論を思付き、主としてロンドン滞在の一兩日間に取急いで書き上げたのであつて、叙述の上にも理論的構成の上にも自ら種々の缺陷を免れ得ないのである。然し現實の價格が限界購買者の支拂ひ得る價格に於て確定されるものとしてそれを重視し、又稍々漠然とではあるが價格が需給を適合せしめる「額」に於て決定されるものとしてゐる點より、一種の限界購買者説を唱へ又需給均衡説を抱いて居た、と言へるであらう。^(註二)

1) Ibid. p. II. cf. p. 10, 11.

(註二) “High price of provisions”が需給論の觀點より重要なことは以上説く所により明白であると考へるが、この小冊子は又當時の政府及び議會に對しても穀價及び救貧對策を講ずる上に少なからざる影響を與へたものゝ如く、前記マルサスの書簡には次の如き一節がある。

A friend of mine gave it to the Chancellor, who called it the best that had appeared on the subject and immediately sent it to Mr. Pitt. I know not the opinion of the latter about it; but, whether from that or from some other source, you will see that in the first report of the committee of the House of Commons, now just published, much of the same kind of reasoning has been adopted.¹⁾

マルサスは一八〇〇年の「穀價騰貴論」の末尾に豫てから考慮し準備しつゝあつた「人口論」第二版の刊行を約束して居るが、遂に一八〇三年の中頃それを出版するに到つた。前記「人口論」初版の所論及び「穀價騰貴論」の内容より判断し、マルサスが「人口論」第二版に於て救貧法及び賃銀が食料品の價格と如何なる關係を有するかを論ずるに當り、「穀價騰貴論」に觀る如き需給論に言及することは容易に想像さるゝ所であらう。但し「穀價騰貴論」と「人口論」二版とは觀點を異にし、前者が、救貧法による救助が如何にして穀價を騰貴せしむるかを説くに反し、後者は主として人口の自然的増加に伴ふ諸弊害の救濟策として救貧法及び賃銀の騰貴が如何なる効果を有するか考慮して居る。従つて「人口論」二版はそれらが何故に若しくは如何にして穀物その他の價格を騰貴せしむるかに就ては詳論を避け「穀價騰貴論」の限界購買者に重きを置く需給論を前提し、たゞそれを運用してゐるのである。

1) Economic Journal. 1879. pp. 270—271. Bonar, *ibid.* p. 419.

例へば、年收一〇〇磅以上を有する人々の財産が倍加するとしても、食料品の価格は殆んど騰貴せざるに反し、労働者及び貧民の所得が増加する場合には著しくその價格に影響するものとして

If we were to double the fortunes of all those who possess above a hundred a year the effect on the price of grain would be slow and inconsiderable; but if we were to double the price of labour throughout the kingdom the effect in raising the price of grain would be rapid and great.¹⁾

と謂ひ、或は労働者若しくは貧民等の限界購買者を表はすに 'the bottom of the scale' なる文字を使用して An additional seven millions acting at the bottom of the scale and employed exclusively in the purchase of provisions, must have had a most powerful effect in raising the price of the necessaries of life, if any reliance can be placed on the clearest general principles confirmed as much as possible by experience.²⁾

と謂ふが如きは何れも文意自體が既に「穀價騰貴論」に於ける新しき需給論をその根底とせることを示してゐる。然しマルサスは、特に 'the bottom of the scale' に脚註を附して「穀價騰貴論」の参照を求めて居り又 "clearest general principle" を 'confirmed' した所謂 'experience' は一八〇〇年のそれを指すこと明かである。これらの諸事情より觀て、人口論二版の所論が必要に應じ「穀價騰貴論」の限界購買者殊にその第一の變形に重きを置く需給論を運用せることは疑ひを入れないであらう。

但し「人口論」二版中には、一八〇〇年の需給論を更に工夫し展開せる如き點を見ない。

1) Essay on Population. 2nd. ed., p. 401.

2) Ibid. pp. 401—402.

一八〇六年及び一八〇七年の「人口論」三版及び四版は、價值論の他の重要な部分を若干修正してゐるに拘らず、^(註一)需給論についてはたゞ二版の所論を再録して居るに過ぎないのである。

(註一) 周知の如く、マルサスは「人口論」二版を出版せる翌年即ち一八〇四年には 'East India College' の教授の地位を約束され、遅くも一八〇七年には經濟學の講義を開始し一八〇六年の「人口論」三版及び一八〇七年の四版は、二版の價值論に關する若干の重要な部分を修正してゐる。

尙茲で一言附記して置き度い點がある。マルサスは穀法論争の頃から或は少くとも一八二〇年の「經濟原理」初版以後はその需給論を稍著しく修正してゐるに拘らず、一八一七年の「人口論」第五版及び一八二六年の第六版に「人口論」二版の需給論に關する諸文をそのまま保存してゐる。この點は一見奇異に感ぜられ、何等かの事情によりて改筆を阻止されたか、或は當時既に彼の興味は主として經濟原論に集中され、「人口論」を多く顧みざりし不用意に基くものとも考へられるであらう。然し私見では、むしろマルサスは強ひてそれらの諸文を修正する必要を認めず或は少くとも痛感せざりしもの、と解せられるのである。この點は後版「穀價騰貴論」に於ける需給論を「經濟原論」に於けるそれとを比較する場合に改めて論ずるであらう。^(註一)

(註一) 一八〇七年の「人口論」三版から一八一四年の穀法論争に關する小冊子の出版に到るまでの間に、マルサスは一八一一年の 'Edinburgh Review' に載せた地金論争に關する評論に於て既に需給法則を非常に重視し、又その前後に於て「カルドウと需給及需給關係に就て論争して居るが、茲ではそれらの點は省略した。

ロ、表現需要烈度に重きを置く需給論

マルサスは一八一四年『Observations on Corn Laws』と題する小冊子を公にし^(註)主として穀法の是非を論じてゐるが、その論議の中で屢々價值論の他の部分と共に需給原則及び需給關係に言及してゐる。それらの所説は多くは簡單且斷片的であるが、恐らく當時彼は既に一八二〇年の經濟原論に於ける價值論の主要なる部分をほゞ構成せるものゝ如く察せられる。例へばこの小冊子に於ける眞實價值の概念と價值尺度に關する見解は、經濟原論初版に於けるそれらと同一であり、又マルサスは前者に於て既に、平均價格『average price』(同書、二五頁)たる自然價格を説明するに、平均的供給『average supply』と平均的消費『average consumption』(同書、二五頁)の關係を用ひ後者に於ける如き需給説の立場を採つて居るのである。

「穀法管見」に於てマルサスは單に需給説の立場をとるのみならず、需給原則を財貨の價格の外に勞働の價值及び外國貿易等種々の問題に運用し、それを「需給の大原則」the great principles of demand and supply と稱してゐる。彼は需給原則の運用を擴充しその重要性を認識すると共に、恐らくそれらと相關的に「穀價騰貴論」及び「人口論」に於ける需給論を更に吟味し、需給及び需給關係のそれらについて一段の考察を進めたものと考へられる。例へば需給關係を表はすに……the supply compared with the demand¹⁾と謂ひ、經濟原論に於けると同一の用語法を使用し、又「穀價騰貴論」が供給を一定のものとして需要者の事情の變化に基く實際價格の騰貴を論じてゐるに對し、「穀法管見」は更に供給側の事情に基因する需給及び需給關係の變化と

1) Observations on Corn Law. 2nd ed. p. 16.

それらに依存する自然價格の騰貴を説き、

The reason why the consumer pays a tax upon any manufactured commodity, or an advance in the price of any of its component parts, is because, if he cannot or will not pay this advance of price, the commodity will not be supplied in the same quantity as before; and the next year there will only be such a proportion in the market, as is accommodated to the number of persons who will consent to pay the tax.¹⁾

と謂つてゐる。この場合の所謂需要に比較しての供給は騰貴する價格を支拂ふ人々の人數に適應する供給であり、換言すれば一定の價格を支拂ふ人々の需要する量と供給との一致關係である。

右の一致關係は單純に需給量の均等關係そのものを意味し得ないことは、明かである。蓋し均等關係自体は前記の如き價格騰貴の前後に於て何等變化しないのみならず、又一定時の異なる二つの價格に關聯するものも互に相違し得ないからである。例へば、マルサスは二國間に於ける穀物の價格の高低と國際取引とを需給關係によりて説明して

..... there is every reason to suppose, that even a large landed nation, abounding in a manufacturing population, and having cultivated all its good soil, might find it cheaper to purchase a considerable part of its corn in other countries, where the supply, compared with the demand, was more abundant.²⁾

And it is impossible to conceive that under very great inequalities in the demand for corn in different

1) Ibid. pp. 6—7.

2) Ibid. p. 16.

countries, occasioned by a very great difference in the accumulation of mercantile and manufacturing capital and in the number of large towns, an equalization of price could take place, without the transfer of a part of the general supply of Europe, from places where the demand was comparatively deficient, to those where it was comparatively excessive.¹⁾

と謂つてゐるが、この場合の需要に比較しての供給は、單に需給の均等關係そのものではあり得ない。^(註1)

(註一) マルサスは穀法論争に關して展開されたりカルドゥとの利潤論争に於て利潤の騰落を需給關係によつて説明するに對し、リカルドゥは需給の割合は利潤率を異にする二國に於て同様に一致するが故にその高低を決定し得ないものとして一八一四年八月マルサスに與へた書簡に次の如く記して居る。

*It would surely be incorrect to say that the cause of the high profits was the greater proportion of demand for produce, when in both countries the supply would be or might be precisely equal to the demand and no move.*²⁾

斯くてマルサスは「需要に比較しての供給」に於てその一致關係をむしろ輕視し、たゞそれを招來するに必要な人數の需要者が支拂はんとする價格に重きを置くべきものと思惟した。換言すれば前記「穀價騰貴論」に於ける限界購買者に重きを置く需給論の第二の變形を展開し、限界購買者でなくそれを含む一定の需給者の支拂ふ價格を以て需給關係を表示すべきものとする需給論を構成するに到つたのである。これがマルサスの用語法に従へば、假りに表現需要若しくは表現需要烈度と稱すべきものに重點を置く需給論である。

マルサスがこの種の需給論を詳説した最初の著作は、一八二〇年の「經濟原論」第一版である。その後彼は

1) Ibid. p. 17.

2) Bonar, Letters of Ricardo to Malthus. 1887. p. 41.

「價值尺度論」(一八二三年)「經濟學に於ける諸定義に就て」(一八二七年)等を公にし、又彼の死後二年を経て一八三六年「經濟原論」第二版が出版されてゐるが、それらの著書は原論初版の需給論を多少修正し展開してゐるに過ぎない。それ故茲では便宜上「原論」初版の需給論を主とし、爾後の論著のそれらを一括して考察するであらう。

先づ需給の意義であるが、マルサスは供給を「販賣の意志と結合せる財貨の生産」¹⁾ 'the production of commodities combined with the intention to sell them'

又は販賣する意志と結合せる販賣のための財貨量 'the quantity of the commodities for sale, combined with the desire to sell them'²⁾としてゐる。

これら二つの供給概念は互に異なり又「定義論」に於けるそれとも若干相違してゐるが、何れも供給の大小を生産される財貨量又は販賣のための財貨量、といふが如き財貨量の多少により測定する供給範圍説の立場を採つて居るのであつて、この點に就てはマルサスは穀價騰貴論以後一貫してゐる。

次にマルサスは需要を購買する能力と結合せる意思 'the will combined with the power to purchase'³⁾ 又は購買手段と結合せる購買意思 'the will to purchase, combined with the means of purchasing'⁴⁾ としてゐる。これらの定義に於て彼が重きを置くのはそれらの用語より推察し得る如く決して財貨量ではない。

一體需要はマルサスによると屢々需要される財貨量即ち需要の範圍 'extent of demand' と、需要者が財貨購

- 1) Principles. 1 st ed. p. 64.
- 2) Principles. 2 nd ed. p. 61.
- 3) Principles. 1 st ed. p. 64.
- 4) Principles. 2 nd ed. p. 63.

買の爲めに支拂はんとする貨幣量によりて示さるゝ需要烈度「intensity of demand」との二様の意義に使用されてゐる。(後段の引用文参照)然し彼はこの二種の用語法を嚴格に區別すべきことを主張するのみならず、價值論に於て單に需要と言ふ場合は需要烈度を意味すべきものとしてゐるのであつて、前記需要の諸定義はこの主旨を要言せるものであることは謂ふまでもない。換言すれば需要に就ては、彼は「穀價騰貴論」の範圍説を捨て烈度説を採つて居るのである。従つて需要の大小即ち購買力を伴ふ購買意思の強弱は、又供給と異り、購買希望者が支拂はんとする貨幣量若しくは價格、若しくは財貨購買の爲めに負擔せんとする犠牲の多少によりて測定され表示されるのであるが、マルサスは又或る場合には需要とそれらの犠牲とを同義に使用して居る。今それらの一、二を例せば

…… while money remains of the same value, a given demand may be represented by a given quantity of money.¹⁾

…… either in conversation or books …… the term demand is use in two very distinct uses; …… one implying …… and the other the amount of sacrifice which the purchasers are willing to make in order to obtain a given portion of it.²⁾

…… the demand will be represented and measured by the sacrifice in money which the demanders are willing and able to make in order to satisfy their wants.³⁾

1) Trans. of the Roy. Soc. of Literature. 1827. p. 74.
2) Definitions. p. 44.
3) Principles. 2nd ed. pp. 61-62.

斯様にマルサスは需給の一方に範圍説を認めつゝ他方に烈度説を採り、價值學說史上稀に見る跋行的見解を示してゐる。

元來價值論に於ける需給の役目は、何等かの種類の價值若しくは價格の決定を説明することに存し、それらの概念は主としてこの目的の爲めに構成されて居るのである。然るにマルサスによると、販賣の爲めに提供さるゝ財貨量即ち供給範圍が價格の高低に影響するに反し、需要者が購買せんとする財貨量そのもの即ち需要範圍は價格とたゞ不確實に關聯し、*but uncertainly connected*。何等必然的の交渉をしない。又假りに需給が共に財貨量即ち需給範圍を意味するものとする、それらは長期的に（「原論」初版六五頁參照）或は常に——即ち短期的にも長期的にも——（「原論」二版六二頁參照）一致し、換言すればそれらの相對的關係は價格の高低如何に拘らず何等變化しない。（「原論」初版六五頁、二版六二頁參照）謂ふまでもなく「均等」そのものは如何なる場合の「均等」も同一である。従つて需給の一致關係そのものは種々相違する價格を説明しない。斯くマルサスは、需要を需要範圍の意味にすることを價格の説明に何等實益なきものとしてこれを排斥した。これに反し需要烈度は價格と直接且つ必然的の關係を有し、需要をこの意味に解するとき、前記の供給と共に一時的及び永續的價格の凡てを説明し得るものとして、次の如く言つて居る。

If the terms demand and supply be understood and used in the here described, there is no case of price, whether temporary or permanent, which they will not determine; and in every instances of bargain and sale,

it will be perfectly correct to say that the price will depend upon the relation of the demand to the supply.¹⁾

マルサスは供給と需要とを大體右の如く觀念してゐるのであるが、彼の需給關係を明にするために需給の種類を一應述べて置く必要がある。

マルサスは需要即ち需要烈度に

一、眞實需要烈度若しくは全需要烈度

一、表現需要烈度

一、潜在需要烈度

の三種を認めてゐる。但しマルサスはこれら三種の需要烈度を特に説明してゐる理ではなく、従つてそれらの意味は主として關係文章より判斷する外はないが、表現需要烈度を除く他の二種の需要烈度が果して如何なるものを意味するかは明瞭でない。尙、彼は屢々何等の形容詞を冠することなく單に需要若しくは需要烈度と云つて、或ひは眞實需要烈度を、或ひは他種の需要烈度を指してゐるのであつて、彼の所謂價格を決定する需給及び需給關係が充分理解されず、正しき評價を受け得ない一半の事情は茲に存すると考へられる。

眞實需要烈度 'the real intensity of the demand'²⁾ 若しくは全需要烈度 'the whole intensity of the demand'³⁾ は、若し需要者間に現實の價格以上の或る價格を支拂ふ能力があり、又事情によりそれを支拂ふことを辭せない場合には、それ自らを表示しないのであつて彼は例へば左の如く言つてゐる。

1) Principles. 1st ed. p. 71. cf. 2nd ed. p. 68.
2) Principles. 1st ed. p. 66.
3) Principles. 2nd ed. p. 63.

But however great this will and power may be among the purchasers of a commodity, none of them will be disposed to give a high price for it, if they can obtain it at a low one; and as long as the abilities and competition of the sellers induce them to bring the quantity wanted to market at a low price, the real intensity of the demand will not shew itself.¹⁾

然しマルサスは全需要烈度が如何なる價格又は貨幣量によりて測定されるか、を明示してゐない。彼は多くの場合、需要烈度を財貨量に關聯せしめ例へば前記引用文に觀る如く財貨の一定量 'a given portion' を獲得する爲めに購買者の負擔するであらう犠牲の量といひ、又は供給される量と比較してのより大なる價值の提供 'the offer of a greater value compared with the quantity supplied'²⁾ と言つてゐるのであつて、この點よりすれば全需要は或は(一)財貨の任意の一定量に對應し得る最大の貨幣量を意味するかと思はれるが、^(註一)恐らく(二)財貨に對して支拂はれ得る最高價格若しくは需要者が種々の財貨量に對して支拂ふであらう貨幣量の中財貨量に比較して最大なる貨幣量を指すものと考へられる。

(註一) 但しこの場合には財貨の單位當り貨幣量の意味に於ける價值若しくは價格は、その最高價格を除く外現實の價格とはなり得ない。

次に表現需要烈度 'demand in esse'³⁾ は市場の狀況によりて現實に喚起され、'called forth'⁴⁾ 或は自からを示現する 'show itself'⁵⁾ 需要烈度であつて、需要者が供給される一定量の財貨に對し現實に支拂はんとする一定の價格

- 1) Principles. 1st ed. p. 66. cf. 2nd ed. p. 63.
- 2) Principles. 2nd ed. p. 67.
- 3) Principles. 2nd ed. p. 64. footnote.
- 4) Principles. 1st ed. p. 68. 2nd ed. p. 65.
- 5) Principles. 1st ed. p. 69. p. 70. 2nd ed. p. 66.

又は貨幣量によりて測定されるのである。

潜在需要烈度 'Demand in posse'¹⁾ は潜在的 'latent'²⁾ に存在する需要烈度であることは疑を入れないが、積極的に如何なるものを指すかは明瞭でない。需要がまだ表現されて居ない場合には、潜在需要烈度は恐らく財貨に對して支拂はれるであらふ最低價格より最高價格に到る種々なる價格によりて示されるのであらう。但し同様にそれを表はす種々なる財貨量と比較しての種々なる貨幣量は、(一)種々なる財貨量に對して表現さるべき種々なる貨幣量を指すか、或は(二)財貨の任意の一定量に對し、多くの場合たゞその一部分のみを表現する前記全需要烈度(一)の潜在的なるものを指すか明かでないが後段の引用文等より觀てむしろ前者を意味するものと看做すべきであらう。又一定の需要烈度が既に表現されてゐる場合に亦潜在需要がより強度の需要烈度と共により弱度のそれを意味するか否かは問題であるが、多分兩者を抱括するものと解せられる。

供給についてはマルサスは特にその種類を明かにしてはゐないが、表現供給 'supply in esse' なる文字を使用してゐる點から考へると、恐らく供給をも表現供給と潜在供給との二種に區別し得るものと思惟したのであらう。表現供給は販賣の爲めに現實に提供される財貨量を謂ふのである。

右の如き種類の需給の中價格の決定に與る供給は表現供給であり、又需要は表現需要を意味するが如く感ぜらるゝ個所もあるが、「原論」二版に於てマルサスはウェストの批評に答へつゝこの點を明示して、次の如く言つてゐる。

1) Principles. 2nd ed. p. 64. footnote.

2) Principles. 2nd ed. p. 67.

Sir Edward West seems to think, that a demand *in posse* can not be called demand; but it does not appear to me that there is any impropriety in so applying the term; In reality prices are determined by the demand *in posse* compared with the supply *in esse*.¹⁾

さてマルサスは右の如き需要と供給との關係「the relation between the demand and the supply」²⁾又は供給と比較しての需要「the demand compared with the supply」³⁾により、價格は決定されるものとするのである。然らば、この需給關係とは一體如何なる關係をいふのであるか。

既述の如く「穀價騰貴論」及び「人口論」の需給論は限界購買者又は労働者の支拂ふ價格に、又「穀法論」の需給關係は需給の一致を招來する爲めに必要な人數の需要者が支拂ふ價格に重きを置いて居るのであるが、少くとも「經濟原論」初版以後は需給の一致關係自體は到底價格を説明し得ず、従つて所謂需給の基本的關係と看做し得ざるものとして輕視し、それを輕視すると共に限界購買者價格の系統に屬する表現需要烈度を偏重し、價格は表現需要烈度によりて示さるゝ需給の相對的關係に依存するものとしたのである。

彼によれば、市場に於て一定の潜在需要が一定の表現供給に對立すると、それらの相對的狀態に應じて潜在する一定の需要烈度が表現され、且つ表現需要烈度の増減は價格の騰落に自からを表現する「the increase or diminution of this intensity of demand, which shows itself in a rise or fall of prices」⁴⁾のである。従つて價格の依存する需給の相對的狀態若しくは關係は、表現需要烈度によつて示されるのである。マルサスは斯の如き表

1) Principles. 2nd ed. p. 64. footnote.
 2) Ibid. p. 65.
 3) Ibid. p. 62.
 4) Principles. 2nd ed., p. 63.

現需要烈度によつて示される需給關係によつて、價格は決定されると謂ふのである。

然し彼の謂ふ供給は供給範圍であり需要は需要烈度であるが故に、相對的狀態又は關係といふも(一)それは果して如何なる交渉又は關係を有し、又(二)自からを價格に示現するといふ表現需要は如何にして如何なる程度に喚起さるゝかが問題である。

マルサスは(一)の點には殆んど觸れて居ない。又假りに關係文章を綜合するとしても、潜在需要の概念が明確を缺く故に、それと表現供給との關係は自ら漠然とせざるを得ない。然しマルサスは前記の如く、需要烈度を價格と共に財貨量と比較しての貨幣量或は財貨の一定量に對して支拂はるゝであらう貨幣量によつて表はしてゐる。換言すれば需要烈度に需要範圍を關聯せしめ、一定量の財貨に對して需要者が一定の價格若しくは一定量の貨幣を支拂ふことを前提してゐるのである。彼が需給關係といふのは、常に需要烈度がこの需要範圍を介して供給に對して有する關係を言ふのである。例へば

1) it is scarcely possible to suppose that the intensity of individual demand should not exist in such a degree among a sufficient number of these two thousand demanders, as to take off the whole of the commodity produced at an increased price.¹⁾

又は

2) In the same manner, if a commodity were to be diminished one half in quantity, it is scarcely possible

1) Principles. 2nd ed. p. 64. cf. 1st ed. p. 67.

to suppose that the sufficient number of the former purchasers would not be both willing and able to take off the whole of the diminished quantity at a higher price;.....¹⁾

と言ひ

3) If it were reduced to the supply of a single individual, it would be a proof that only one of all the former purchasers was both able and willing to make an effective demand for it at the advance price.²⁾

と謂ふは何れも生産された財貨の全量、半減せる供給量、又は一人分の財貨量といふが如き一定量の現實の供給量に對し、その量を購買するに就て、換言すれば一定の表現供給に對し一定の需要範圍を通して、需要者の支拂はんとする一定の價格即ち需要烈度を關連せしめて居るのである。

茲で一言して置き度いのは右の點に關する原論初版と二版との相違である。前者が主として需要の表現を説き潜在需要を軽く取扱ふに反し後者は潜在需要を重視し、それが價格の決定に與ることを明言すると共に、新に 'demand in posse latently' 等の文字を使用して居ることは既に述べた所からほゞ推察されると考へるが、前記引用文(一)に於て原論初版が 'increase' とせる點を二版が特に 'exist' に修正して居ることは看過してはならぬ。謂ふまでもなく、原論初版の 'increase' は任意の一定量の供給に對し、表現さるべき需要の増減を云々するに對し、二版の 'exist' は任意の一定の表現供給に關し一定の潜在需要の存在することを意味する。

然らばマルサスは所謂需給關係に於て、需給範圍と表現供給との如何なる關係を前提するのであるか。彼は

1) Principles. 1 st ed. p. 67. 2 nd ed. p. 64.

2) Principles. 1 st ed. p. 68. cf. 2 nd ed. p. 65.

この關係を主として需要の表現に關聯して説いて居る。

表現需要は如何にして如何なる程度に喚起さるゝか、に就てのマルサスの見解は前記(一)のそれに比較して遙に明瞭である。彼は既に述べた如く、需給範圍の一致關係自體は價値の決定を説明しないものとして斥けてゐる。然し、それは彼が需給範圍の一致關係を、全然無用のもの無視すべきものとしてゐることを決して意味するものではない。否、彼の表現需要は或は暗黙に或は明瞭に、常に需給範圍の一致關係を前提し、需要は需給範圍の一致を招來する限度に於てのみ表現されるもの、購買者の現實に支拂はんとする價格は財貨量としての需給の均等關係に依存するものとして居るのである。例へば前記の引用文に觀る如く彼は、表現需要烈度即ち需要者の現實に支拂はんとする價格を説明し、生産された財貨の凡て 'all the commodity produced' を 'take off' するに充分な人數するに充分な人數の支拂ふ價格、或は財貨の全體 'the whole of the quantity' を 'take off' するに充分な人數 'sufficient number' の需要者が支拂はんとする價格として居るのである。従つて表現需要烈度がそれ自らを現實の價格に示現することは謂ふまでもない。

マルサスは斯くの如き意味の表現需要烈度によりて示される潜在需要と表現供給との相對的關係が價格を決定するものとし、表現需要を彼の需給論の中心に置き、如何なる事情が需要烈度の表現 'expression'¹⁾ を喚起するかを詳論してゐるのである。^(註一)

(註一) マルサスは彼の所謂需給關係を明かにしたる後

1) Principles. 1st ed. pp. 67, 68, 69, 70. 2nd ed. pp. 64, 65, 66, 67.

... the real question is what are the causes which either call forth or render unnecessary the expression of this intensity of demand. (... this intensity of demand, which shows itself in a rise or fall of prices. 2nd.)¹⁾

と言ひ、需給論の眞實の問題は價格にそれ自身を表現する表現需要烈度の強弱を決定する事情、換言すれば表現需要烈度によりて示さるゝ需給關係に影響する事情の研究にありとして、原論初版に於ては、財貨購買者の數又は欲望「the number or wants of its purchasers」の増加又は減少、供給の不足「a deficiency in supply」又は豊富「an increased abundance in supply」(六七頁参照)更に原論二版に於ては、それらの外供給側の事情と共に購買者の數、欲望、及び資力「the number, wants and means of the demanders」(六四頁参照)の増減のそれ〴〵が如何に表現需要烈度若しくはそれによりて示さるゝ需給關係に作用するかを詳論してゐる。然し價值學說史の觀點よりすればそれらの所論は主として彼の需給關係又は表現需要烈度を了解する上に重要性を有するが、それ自體としては特に茲に紹介する必要なきものと考えらる。

三

以上説く所によりてほとゞ明かである如く、マルサスの需給論は、穀價騰貴論及び人口論に於ける限界購買者又はその具體的代表者と觀るべき労働者に重きを置く需給論と、穀法論以後經濟原論二版に到る表現需要烈度に重きを置く需給論との二種に區別することが出来る。今それ〴〵の需給論を詳説し、若しくは展開せる代表的著作として「穀價騰貴論」と「經濟原論」二版をとりそれらの需給論を比較すると、供給の概念に於て、需要の分析に於て、又價格の依存する需給及びその關係を明確にせる程度に於て、後者は著しく進歩し又「穀價

1) Principles. 1st ed. p. 66 cf. 2nd ed. p. 63.

「騰貴論」が需要を需要範囲とし限界購買者に重きを置くに對し、原論二版はそれらを需要烈度及び表現需要烈度に修正する等種々相違點を指摘し得るであらう。然しこれら二書の需給論は、その中間の人口論及び穀法論に於ける需給論と共に、大體に於てその根本的の結構を等しくする同型のものであると言へる。

蓋しそれらの論著は何れも需給の均等關係を認め、且つたとへその重要性を充分意識しないとしても、それを夫々の需給論の礎石として居り、又一方は限界購買者に、他方は表現需要烈度に重きを置くが、限界購買者の支拂ふ價格は又限界購買者以上のものが現實に支拂はんとする價格であり、表現需要烈度は單にそれらの限界購買者及それ以上の購買者の支拂はんとする價格を總稱するに過ぎないのである。

既に述べた如く、マルサスは一八〇三年の人口論二版に於ける限界購買者に重きを置く需給論を、そのまゝ表現需要烈度若しくはそれに類するものに重きを置くに到つた一八一七年及び一八二六年の人口論五版及び六版に再録して居るのであるが、恐らくそれらの需給論が強ひて人口論五版及び六版の修正を必要とする程度に相違せず、根本的には同様の立場に立つて居ることに基くものと察せられる。

従つてマルサスの需給論は、既に穀價騰貴論の限界購買者に重きを置く需給論によつてその基本的部分が構成され、爾後それを發展しつゝ多少變形し、遂に經濟原論の表現需要烈度、換言すれば變形されたる限界購買者に重きを置く需給論、に到達したものと言へる。

四

以上の需給論を以てマルサスは古典學派の價值學說史の一部分としての需給論史の上に如何なる地位を占むるであらうか。換言すれば、古典學派の他の需給論に比較して彼の需給論は如何なる特徴を有し、又如何なる評價を受くべきであるか。

アダム・スミスよりケアンズに到る古典學派の需給論は、單に價值學說中に存するものに就て言ふも實に多様であつて、需給及び需給關係に就て種々雜多の見解を包有してゐる。それらの需給論は共通の特徴を有しないことをむしろその特徴とし、又その如何なる需給論も、古典學派の全時代を通じては支配的勢力を有するに到らなかつたのである。然しそれらの需給論の中、理論的に觀て重要であり且つそれらの時代を代表すると看做し得るものは、大體

一、需給比例説

二、限界購買者説及びそれに類するもの

三、需給均衡説

の三種に區別することが出来る。

需給比例説に屬する需給論も決して一樣ではないが、最も代表的なるものはスミスの需給論であらう。彼は

需要を自然價格に於て需要される財貨量、供給を市場に提供される財貨量とし、それらの比例關係によりて實際價格殊に自然價格以上又は以下の背離價格を説明した。リカルドウはこの種の需給論を巧みに貨幣價值の問題に運用し、彼の後繼者は多少修正し展開しつつこの傳統的需給論を固守してゐる。

限界購買者説及びそれに類する説といふのは、マルサスの限界購買者説及表現需要烈度説の如きものを指すのであるが、後段述ぶる如く、エドワード・ウエストが最下層者説とも稱すべき一種の限界購買者説を説いて居る。

需給均衡説はJ・S・ミルによりて高調され又詳論され、彼はその最も有力なる代表者であるが、ケアンズの需給對應説も又變裝したる均衡説と言へるであらう。

右の三種の需給論は、それらの代表者若しくは支持者より推察し得る如く、(一)の需給比例説は主として古典時代の前半期に於て、(二)の限界購買者説又はそれに類するものは大體その中頃に、又(三)の需給均衡説は中頃以後に於て行はれてゐた。

今右の三種の需給論とそれらの行はれた時代の代表者を假りに一人づゝ挙げるとすれば、古典時代の前半期の需給比例説に就てはスミス、中頃の限界購買者説及びそれに類するものに就てはマルサス、而して後半期の均衡説に於てはミルを推すべきであり、此の意味に於ては、スミス、マルサス及びミルは同列に置かれる。

然し右の簡単な叙述によりてもほど明かである如く、需給比例説は古典學派の謂はゞ古い需給論であり、こ

の種の需給論はスミスを代表者としリカルドウ及びその後継者によりて支持され、他の需給論に比し遙かに長く行はれた結果、應々古典學派の代表的なる需給論の如く看做されて居るが、むしろ單に古典時代の前半期を支配したに過ぎない古典學派に於ける舊式の需給論であると看做すべきであらう。蓋し自然價格に束縛されて居る需給比例説は、その根本に缺陷を有し、リカルドウ後継者の例に見る如く如何に工夫し修正するも到底充分に價格を説明しないからである。この舊式の需給論に對し自然價格より解放され、それと全然異なる結構を有する他の二種の需給論を古典學派の新しい需給論といふことが出来る。この新しい需給論を最初に提唱したのはマルサスである。

マルサスの「穀價騰貴論」に遅れること二十六年、即ち一八二六年エドワード・ウエストは「Rise of Corn And Wages of Labour」と題する一書を公けにし、その中で既述の如き一種の限界購買者説を述べてゐる。彼の需給論の構想は一八一五年の「The application of capital to the land」に於ける地代論のそれに類似し共に極めて簡明であり、後者が需要さるゝ穀物の價格を最劣等地に於ける生産費に依存せしめるに對し、前者は一般に財貨の價格をその供給の及ぶ最下層「the lowest class」の欲望と資力「the want and means」によりて決定されるものとして居るのである。即ちその需給論は、マルサスの人口論に於けるそれにほと類似するのであるが、所説極めて簡單で「穀價騰貴論」より「經濟原論」二版に到るマルサスの需給論には到底及ばない。殊に需給論の觀點よりすれば、「最下層説」は需給の一致關係を前提するに拘らず、ウエストはその點に觸れてゐない。

次にミルは周知の如く一八四四年の「經濟學上の若干の未決問題」に於て、又一八四八年以後の「經濟原論」に於て、更に一八六九年 *Fortnightly Review* に載せた *William Thomas Thornton* に對する駁論に於て需給均衡論を述べて居る。殊にこの最後の需給及び需給の均衡關係に就て *Thornton* を辯駁する一文は、文章態度及び理論的内容に於て古典學派の需給論中の傑作であつて、そこに展開されて居る需給論は今日尙存する平凡な需給論より遙に優つてゐる。この需給論とマルサスのそれを比較するならば、需給の概念に於て需給關係の把握に於て後者は到底前者に及ばない。

然しウエストが需給の均衡に言及せざりし如く、ミルは限界購買者を多く顧慮して居ない。マルサスは之に反し直接或ひは間接に需給論に於ける重要な二點を取扱つて居る。従つて彼は單にウエストのみならず或る意味に於てミルの先驅者と言へるであらう。更に考慮すべきはマルサスとミルの何れがより多く需給論へ積極的の貢獻をなしたかの點である。

マルサスの需給論に類するものは、古典學派には彼以前になく、マルサスは謂はゞその限界購買者説若しくは表現需要説の全部に於て英國の價值學說に貢獻したと言へる。而してそれをミルがマルサス、ソーントン、ケアンズ等の所説に附加し若しくはそれを修正した點と比較するならば、マルサスの貢獻はミルのそれに比較して劣るとは容易に言ひ得ないであらう。

